KAPPA NOVELS

長編推理アクション小説

星の旗 下

森村誠一

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、最近、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
(〒112-11)
光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編推理アクション小説　星の旗 下

1994年10月25日　初版1刷発行

著者　森村誠一（もりむらせいいち）
発行者　森元順司
印刷者　堀内俊一
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 00160-3-115347
株式会社 光文社
電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(明泉堂製本)
表紙の模様・意匠登録 116613
© Seiichi Morimura 1994

ISBN4-334-07110-4
Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03—3401—2382)にご連絡ください。

長編推理アクション小説

星の旗 下

森村誠一

カッパ・ノベルス

星の旗〈下〉　目次

明朗な開幕　5
怨みの残像　22
粗大化(そだいか)した象徴　54
落ちた権威　75
戦争の能書(ノリト)き　97
面汚しの対決　107
狙撃された切り札　132
敵のアキレス腱(けん)　148
五十年後の特攻　168
悲しい再会　186
ごまめの勝鬨(かちどき)　219
風化する墓参　236
別線の刺客　254
終　章　268

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

イラストレーション　坂本富志雄

明朗な開幕

1

新荘市は木島の住んでいる——市の隣県にある最も近い市である。

人口は市に劣るが、交通の要衝で活気がある。

この新荘市は一誠会における大門組の対抗馬小柳一家義人会の拠点である。

県は異なっているが、それぞれの本拠地が県境を挟んで、最寄りの市にあったことが大門組と小柳一家の対立を深めていた。

七月九日の夜、サラリーマン朝岡と北本は新荘市の繁華街札の辻の裏通りを歩いていた。ボーナスが出たばかりで懐ろが温かい。

二人は大阪に本社を置く名の通った医療器具販売会社の社員で、今度新設された新荘支店に赴任して来て間もない。

医療器具を中心に健康器具、健康食品なども扱っている。

本社から派遣されて来たのは支社長の朝岡、支社長代理の北本の二人だけで、いずれも二十九歳、独身である。

新支社店舗の開設から二十歳前後の若い新入社員の採用、教育、営業の展開まですべてを任された二人の意気は軒昂たるものがあった。

彼らはこの新天地の開拓を任され、開店一カ月以内に注文三百本、三カ月を目標に、ブロック地域最優秀先輩支社を追い抜き、一年間で全国最優秀支社

を目標とする「支社訓」を定め、まさに天下を呑むような気勢で支社をオープンした。
朝岡と北本の熱気を受けて若い新入社員も頑張り、一ヵ月に目標をはるかに超える五百本の受注をした。
大いに気をよくした朝岡と北本は、今宵、新入社員を市内随一のレストランに呼んで慰労した。
この調子なら、一年どころか半年で全国最優秀支社を追い抜きそうである。
慰労会が終わった後、朝岡と北本は札の辻へ出た。まだ飲み足りないおもいであった。
新支社の急成長は新入社員の活躍に支えられている。特に女子社員の活躍が目ざましかった。彼女らはいずれも高卒間もない十八歳から二十歳未満の娘たちであるが、朝岡らの意を受けて若いバイタリティにものを言わせて頑張ってくれた。
三次会まで重ねてようやくお開きにしたが、単身赴任の朝岡や北本にしてみれば、朝まで彼女らと一緒に飲み明かしたい気分であった。
支社長自ら職場の花に手をつけては部下にしめしがつかなくなる、と痩せ我慢を張って彼女らと別れたが、興奮が残って、まだ帰りたくなかった。
札の辻の裏通りには暴力団が経営している暴力バーがあるという噂を聞いていたが、メートルが上がるうちに忘れてしまった。
「寄っていらっしゃいませんか」
千鳥足の二人に突然若い女の声がかかった。
声の来た方角に酔眼を向けると、街角に二十歳前後と見える若い娘が立っている。
「瀬川君じゃないか。まだ帰らなかったのか」
朝岡が目を剝いた。北本も驚いた目を向けている。
なんと先刻別れたばかりの女子社員のピカ一、瀬川弘子が街角に立っている。
「あら、私がだれかさんに似ているみたい。光栄だわ。だったら、どうしても寄っていただかなけれ

ば」
瀬川弘子と見誤ったのはバーの呼び込みらしい。
「よく似ているねえ。てっきり瀬川君かとおもった」
「きみ、瀬川君の姉妹かなんかじゃないの」
二人は呼込み娘に声をかけた。
「きっとそうかもよ。瀬川さんの父親が生ませた隠し子なの。ぬわぁんちゃって」
女は軽口をたたいた。
その間に二人の間に寄り添って、しっかりと二人の手を抱え込んでいる。
二人は彼女につかまって、裏通りのとある一軒のバーに引っ張り込まれた。
「お客様をお連れしました」
「いらっしゃいませ」
カウンターから威勢のよい声がかけられて、
「まあ、いい男、わあ、きゃー」
と二人は嬌声と共に、数人のけばけばしい女に取り囲まれていた。
なにも注文しないうちに、テーブルにどかどかとウィスキーボトルやアイスペールやつまみ物が並べられ、二人をべったりとはさんでホステスがウィスキーの水割りをつくっている。
二人はいやな予感をおぼえた。
瀬川弘子に似た呼込み娘の姿は、いつの間にか消えている。
カウンターにいる若い男もどことなく凄味がある。
だが、蜘蛛のようにまつわりついているホステスたちの手を振り払って、いまさら逃げ出すわけにはいかない。
二人はとにかく一杯ずつ水割りを飲むことにした。
「私たちもいただくわね」
いいとも言わないうちに、ホステスたちはいかにも高そうなボトルのスコッチを、それぞれのグラス

に鷹揚にどぼどぼと注いだ。
「私、フルーツが欲しいわ」
ホステスの一人がカウンターに声をかけると、待っていたようにメロンやパパイアやドリアンなどを山盛りにしたフルーツプレートを、カウンターにいた目つきの鋭い男が運んで来た。
その間に腐ったような年増の女が、朝岡と北本の股間に手を伸ばしている。
二人は水割りのグラスに形ばかりに口をつけると、立ち上がった。腰を下ろしてから十分もたっていない。
「あら、もうお帰り」
「まだ来たばかりじゃないのよ。さてはだれかが待ってるな」
「私たちではご不満というわけね」
「不満は不満でも、下の方がフマンなんだって」
「そうと聞いて帰したら、女がすたるよ」
ホステスたちはてんでに勝手なことを言いながらからみついてきた。
それを挽ぎ離すようにして、
「今日は時間がないんだよ。お愛想を頼む」
と言った。
「今日は釈放してあげるけれど、また来てね」
女たちは渋々とからめた手を離すと、カウンターの男に、
「店長、お愛想をお願いします」
と言った。
「毎度有難うございます」
店長が小さなトレイに載せて持って来た勘定書に目を向けた朝岡は、わずか十分ほど腰を下ろした値段にしては少し高いとおもったが、請求された通りの金額を財布から出した。
「へへ、お客さん、冗談はやめてくださいよ」
朝岡が差し出した紙幣を見て、店長がにやりと笑

った。顔は笑っているが、目は少しも笑っていない。
朝岡には店長の言葉の意味が咄嗟にわからない。
「お客さん、伝票をよく見てくださいよ」
店長に促されて、二人は改めて伝票に目を向けた。
二七の後につづく〇の数を数えて、二人は仰天した。
「二十七万……冗談じゃない」
「本当に冗談じゃありませんよ。お客さん、札の辻でこれだけの女に囲まれて、二万七千であがるとおもっているんですか」
店長の目が鋭い刃物のように光った。
「ぼくらは店に入って十分もいなかった。それぞれ水割り一杯しか飲んでいない。二十七万なんて、どういう計算をしたんだ」
朝岡は店長から吹きつけてくる凶悪な気配に堪えて言った。
「お客さん、うちの店に言いがかりをつけるつもりですか。うちは札の辻の一流店ですよ。お客さんがロにしたのはバレンタインの三十年ものです。最高のスコッチです。女の子を五人も侍らせて、季節のフルーツも出しています。決して不当な料金ではありませんよ」
「そんなものを注文したおぼえはない。女たちが寄ってたかって勝手に飲んだのではないか」
「いい齢をして、そういう非常識なことを言わないでくださいよ。女の子のいる店に入って、女の子が相伴するのは当たり前じゃないですか。女の子に飲まれるのがいやなら、女のいない店へ行けばいい。女のいる店へ入って来てそんなことを言っても、通りませんぜ。テーブルチャージ、ボックスチャージ、サービスチャージ、税金を入れれば、この料金はむしろ安いくらいです。それとも、お客さん、最初から因縁をつけて踏み倒すつもりじゃないでしょうね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

店長がすっと立ち上がったのを合図に、店の奥にあるらしい別室からコネクティングドアを開いて二人の若い男が出て来た。
一目見ただけで筋金入りのヤクザであることがわかる。
パンチパーマにサングラス、きらきら光る素材のスーツを身に着け、先の尖ったエナメルの靴を履いている。
「店長、なにか騒がしい気配だが、なんかあったんですかい」
彼らはドスのきいた声で言うと、サングラス越しに朝岡と北本の方を睨んだ。
「いや、なんでもない。このお客様が料金のことでちょっと質問していただけだよ」
店長がさりげない声で答えた。
「そうですかい。うちは明朗会計ですからね。わからないことがあったら、なんでも聞いてください
よ」
二人のヤクザはサングラスの底からにやりと笑った。
それとなく見せている彼らの一人の小指は、第一関節から欠損している。他の一人はロレックスの腕時計をはめた手首に、彫り物の端が覗いている。
表情が濃いサングラスに隠されている。口許だけで笑っている彼らから迫ってくる圧力は、抜き身の凶器を胸元に突きつけられたように朝岡と北本を萎縮させた。
女たちの、また来てねの声に送り出された朝岡と北本は、先刻までの天下を呑むような気勢はどこへやら、空気の抜けた風船のように悄然となった。
懐中のボーナスはおおかたむしり取られてしまった。
この足で警察へ訴え出ようかとおもったが、いまのヤクザの迫力をおもいだすと二の足を踏んでしま

う。
それにバレンタインの三十年ものに女が五人も侍ったのでは、それくらい取られても仕方がないような気もしてくる。要するに認識不足であった。
高い月謝だとおもってあきらめる以外になさそうだった。

2

「お二人とも、『ランバダ』でなにかあったようですね」
打ちのめされて歩いていた二人に、背後から声がかけられた。
振り向くと三人の異様な男が立っている。いずれも上下茶系統の作業服をまとい、登山帽、濃いサングラス、マスクをつけている。
年齢不詳であるが、ひたひたと壁のように迫ってくる異様な圧力があった。
「ランバダ?」
朝岡がかけられた言葉を繰り返した。
「あそこは暴力団が経営している悪名高いバーですよ。被害者が頻々と出ているが、警察と癒着しているので、訴え出ても取り上げてくれません」
三人組のリーダー株らしい男が渋い声で言った。
言われて朝岡と北本は、ランバダというのがいまぼられた店の名であることを知った。
「ところで、いくら取られましたか」
三人組のもう一人が問うた。彼の右の耳朶が千切れている。
「二十七万円です」
三人組の素性を確かめる前に、彼らの迫力に押されて北本が答えてしまった。
「ほう、決して安くない料金ですな。店にどのくらいいましたか」

三人目が問うた。
「腰を下ろしたのはせいぜい十分です。女が五人、わっと寄って来て、注文もしないのにバレンタインの三十年ものとか称するウィスキーを勝手に相伴して、フルーツだのテーブルチャージだのが加算されて、二十七万円は決して高くない明朗会計だと言ってました」
「二人で十分腰を下ろして、二十七万が明朗会計とは恐れ入りましたね」
三人組が喉の奥でくくくと笑ったようである。
「よろしい。従いて来なさい。ぼられた金を取り返してやりましょう」
三人組のリーダーが言って、ランバダの方角へ向かって歩き出した。
否も応もない。二人が従いて来るのを確信しているようである。
二人は三人組の異様な迫力に引きずられるようにして従いて行った。
登山帽三人組と朝岡と北本がランバダへ入って行くと、店長と二人の用心棒、および五人のホステスがボックスに集まって酒盛りをしていた。
カモから二十七万むしり取ったので、祝杯をあげていたらしい。
店に入って来た五人の姿を見て、店長が、
「いらっしゃ……」
とかけようとした声を途中で喉の奥に呑んだ用心棒以下、店の者はぎょっとなった。
先刻の二人に登山帽、サングラス、マスクをつけた異様な三人組が加わっている。女のいるバーへ飲みに来る風体ではない。
用心棒がすっとボックスから立ち上がった。
緊迫した雰囲気の中に三人組のリーダーが、
「いまそこでこの二人に会いましてね、なかなかいい店があると紹介されてやって来ました。私らにも

バレンタインの三十年ものを飲ませてください」
三人組の一人がマスクを外して渋い声で言った。
マスクを取った顔は意外に老けているようである。それがまた彼らの不気味な雰囲気を増幅している。
だが、店長以下用心棒は警戒の構えを解かない。
「金はあります」
すかさず二人目の耳朶の千切れた男が、懐中から分厚い財布を取り出した。少なく見積もっても五十万円は入っていそうである。
店長がなにか言う前に、女たちが歓声をあげた。
「まあ、嬉しい」
「うちは明朗会計ですから、そんなにいらないわよ」
「腕によりをかけてサービスしちゃう」
五人のホステスが手を引くようにして三人組をボックスへ案内した。
店長と二人の用心棒は、その様を胡散くさそうな目をして見ている。
「さあさあお二人とも、そんなところに不景気な顔をして突っ立っていないで、ここへ来て一緒に飲みなさい」
三人組は用心棒をさし招いた。
用心棒が間の悪そうな顔をしてボックスに腰を下ろした。
朝岡と北本も、三人組のかたわらにおっかなびっくりといった体で腰を下ろす。
テーブルの上に先刻、朝岡らに出した同じウィスキーのボトルとフルーツを盛った皿などが出された。
ホステスが人数分のグラスにウィスキーを注いで水割りをつくる。
「わしはストレートでいただく。水で割ると、せっかくのバレンタインの三十年ものの味が薄くなるでな」
三人組のリーダーが言った。

ホステスの一人がリーダーのグラスにウィスキーを注ぐと、
「二フィンガー、二フィンガー」
と三人目がテレビのCMを真似た。
「それでは乾杯」
リーダーの音頭によってグラスを口に運ぶ。
「うっ、ぷっ」
グラスの中身を口につけるとほとんど同時に、リーダーがむせたような声を発した。
「大丈夫?」
かたわらに侍ったホステスが声をかけると、
「悪い冗談はやめてもらいたいな。これが三十年もののバレンタインだと」
リーダーが言って、わざとらしく口中に残ったウィスキーを床に吐き出した。
「なんだって」
店長と用心棒が顔色を変えた。
「お主たち、こんな安物のウィスキーをバレンタインの三十年ものとは、ずいぶんあこぎな商売をしておるの。こんなウィスキーではせいぜい吹っかけてもワングラス千円がいいところだ」
「てめえら、因縁をつけるつもりか」
用心棒が凄んだ。
「どういたしまして。私らは三十年もののバレンタインが飲みたくてやって来たのだ。本物を出してくれれば、それに相応する料金は払うつもりだよ。早く三十年ものを出しなさい」
リーダーの言葉には異様な迫力があった。
カウンターの店長も二人の用心棒も咄嗟に返す言葉を失った。
「早く出しなさい。それともこの酒があくまでも、バレンタインの三十年ものと言い張るなら、出るところへ出て争ってもいいが」
「てめえら、最初からそのつもりで来やがったな」

用心棒が凶悪な気配を全身にみなぎらせて凄んだ。
「そのつもりとはなんだな。わしらは最初からバレンタインの三十年ものがお目当てだ。お主ら、まさかこの安物ウィスキーをこのお二人さんに提供して、二十七万もぼったのではあるまいな」
耳朶の千切れた男が静かな声で問うた。あくまで穏やかな声音であるが、腹に響くような不気味な迫力を持った声である。
「そうだとすれば、二十七万円は返してもらわなければなりませんな」
三人目が言葉を継いだ。
三人とも墓場からよみがえってきたかのような鬼気を全身から放射している。
ランバダの者たちは、ようやくこの三人組が尋常の者ではないことを悟った。
「てめえら、なめやがって。この店をだれが仕切っているのか知っているのか」
用心棒が恫喝した。たいていの客はその言葉ですくみ上がってしまう。
「小柳一家だろう。天下の小柳一家も、こんなせこい仕事をするとは落ちぶれたもんだね」
リーダーが言った。
三人組は店の正体を知っていて乗り込んで来たのである。
店内に殺気がみなぎった。女たちは剣呑な気配を逸速く悟って、別室の方へ避難した。
「てめえら、痛い目に遭いたくなかったら、おとなしく帰んな。いまの料金はまけてやる」
店長が言った。
「なにか忘れていないかね」
リーダーが言った。
「忘れているだと?」
「二十四万、こちらのお二人に返しなさい。三万は明朗会計の代金として支払う。それでも少し高いが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong